

紹介

マルチン・ヘールweg著『カール・マルクスにおけるプロレタリアートの立場』

Martin Hellweg: Die Stellung des Proletariats bei Karl Marx. Frankfurt/Main, G. Schulte-Blumke Verlag, 1947. ss. 31.

フリッツ・ベレンス著『若きマルクスにおける経済學の發展』

Fritz Behrens: Zur Entwicklung der politischen Ökonomie beim jungen Marx. Berlin, Aufbau Verlag, Aufbau 9 Jahrg. 1953 Heft 5. ss. 444—456.

宮 鍋 幟

戦後のわが國におけるマルクス研究の課題の一つは、周知の

紹介

ように、マルクスの追思惟、いいかえれば、「マルクスの思想とくに『資本論』に結實する經濟學批判の基本原理を、完成した體系からではなく、發生史的に、その形成過程を追思惟すること」⁽¹⁾であり、その手はじめとしての、「若きマルクス」研究である。われわれはこれについて、すでに、いくつかの業績もつているのであるが、そこに共通する悩みの一つは、外國文獻の不足、ということであろう。マルクス研究の他の領域、たとえばマルクス再生産論ないし恐慌論においては、戦前戦後を通じて、國外の研究が比較的はやく紹介、翻譯され、これにかんするわが國の研究を、國際的視野のうちに位置づけかつ發展せしめるのに役だっている。しかるに、「若きマルクス」研究においては、これまで、外國文獻の翻譯はもとより紹介すら、ほとんど行われることがなかった。このことは、研究者の努力の不足というよりも、むしろ問題の新らしさのために、この種の研究成果が諸外國でもほとんど出版されていなかつた、という事情に起因してゐるのである。

幸ひ最近にいたつて、「若きマルクス」研究についての外國文獻も入手しうるようになり、おそまきながら、われわれの悩みもどりのぞかれつつあるようである。これらのうち、ドイツ語で讀みうるものを、わたくしの知るかぎりにおいて列挙すれば、次のとおりである。

(1) M. Hellweg: Die Stellung des Proletariats bei Karl Marx. Frankfurt/Main, 1947.

一 橋論叢 第三十一卷 第三號

- (2) H. Mayer: Karl Marx und das Elend des Geistes. Meisenheim/Glan, 1948.
- (3) E. Thier: Die Anthropologie des jungen Marx nach den Pariser ökonomisch-philosophischen Manuscripten. Köln u. Berlin, 1950.
- (4) A. Cornu: Karl Marx und die Entwicklung des modernen Denkens. Berlin, 1950.
- (5) F. Behrens: Zur Entwicklung der politischen Ökonomie beim jungen Marx. Berlin, 1953.
- (6) K. Bekker: Marx' philosophische Entwicklung, sein Verhältnis zu Hegel. Zürich, 1940.
- (7) H. Poplitz: Der entfremdete Mensch, Zeitkritik und Geschichtsphilosophie des jungen Marx. Basel, 1953.

右のうち、(1)と(5)では、(1)と(5)を紹介してみたいと思う。

註(1) 長州一二「K・マルクス『ヘーゲル國法論批判』について」(横濱國大經濟學部、大學紀要、一九五三年、所載)七七頁。

(2) たとえば、田中吉六、梯明秀、黒田寛一、向坂逸郎、柳田謙十郎、福田滿輝、長州一二、芝田進午、小松攝郎等の諸氏による著書および論文がある。

(3) 全く行われなかつた、というのではない。たとえ

ば、戦後のものとしては、柴田・脇・安藤の三氏によるカール・レヴェンツェルト『ウエーバーとマルクス』(一九四九年、弘文堂)の翻譯、および、淡内氏によるB・A・トーマキー『マルクス、ヘンゲルスにおける國家論の發展』の紹介(『思想』一九五二年九月號)があり、それぞれ「若きマルクス」研究に示唆を與えている。

(4) 大體、入手した順に記したのであるが、(3)はK. Marx: Nationalökonomie und Philosophieに附せられた解説(4)はA. Cornu: Karl Marx et la pensée moderneの獨譯(6)は昨年未入手したもので新版の年度が不明なので初版の年度を記した。さらに(7)はまだ入手していない。

二

一般に、マルクスは、『ライン新聞』時代の急進民主主義的段階をこえて、『獨佛年誌』においてはじめて、共產主義的段階へ移行した、といわれている。この時期におけるマルクスの發展を特徴的に示すものは、前者における「貧しい、政治的社會的に無所有の大家」(『木材竊盜法討論』)へのヒューマニスティックな同情から、後者における、「プロレタリアート」の發見(『ヘーゲル法哲批判序説』)への前進であろう。マルクスは『ヘーゲル法哲批判序説』において、はじめて、被搾取労働者階級の立場にたち、そしてこれをプロレタリアートとして表現したのである。

では、マルクスがプロレタリアートの立場にたつにいたつた、という言葉の、より深い意味は何であらうか。ヘルヴェークの『カール・マルクスにおけるプロレタリアートの立場』は、この點の解明にあてられている。著者ヘルヴェークについては、この書に附せられた略歴によれば、Der Begriff des Gewissens bei J.-J. Rousseau なる學位論文をもつて、マールブルグ大學を卒業（一九三六年）したが、ナチスに反對であつたために、大學にとどまることが許されなかつたようである。かれはこの他にも Romanische Forschungen. 1938. を著しており、現在（一九四七年）は Studienassessor である。大學では言語學を専攻した、となつてゐるが、彼のアルバイトからすれば、哲學者である、といつてもいいであらう。

マルクスは、その青年時代の著作において、ヘーゲルと二度にわたつて批判的に對決した。すなわち、『ヘーゲル國法論批判』（以下『國法論批判』と略記する）と『ヘーゲル法哲學批判序説』（以下『法哲批判』と略記する）とにおいて。しかしここで、ただちに、次のような疑問が生じてくる。それは、なぜマルクスは、彼の時代の現實たる發展しつゝある資本主義の現實と、哲學の媒介なしに、直接に對決しなかつたのであらうか、という疑問である。「マルクスは、うたがひもなくのちに『資本論』のための準備的草稿でなしたように、種々の統計と報告書を研究することができ、それによつて、おそらくは同様な現實像に到達しえたはずであるのに」とヘルヴェークはい

つてゐる。

それにもかかわらず、マルクスがそうしなかつたのは、この時期のかれにとつてはなによりもまず、「それによつて頑強な現實を把握しうる、一つの基盤を見出すことが問題であつた」からであり、また、ドイツ哲學は、おくれたドイツの諸事情にかゝりならず、哲學的には現代と同時代人だつたからである。當時のドイツの政治事情は、歴史の水準以下にあつた。すでに他の諸國民が前進的な運動を行つてゐたのに反して、ドイツにおいては舊政治 (ancien régime) が支配的であつた。そしてドイツ人は、他國民が實行したことを、政治（哲學）の上で考へたのである。『われわれドイツ人は、現代の歴史的同時代人となることなしに、その哲學的同時代人となつてゐる。ドイツ哲學はドイツ史の觀念的延長である。したがつて、もしわれわれが……わが哲學を批判するならば、われわれの批判は、現代が、これこそ問題だ、といつてゐる當の諸問題の中心にふれることにならう』（『法哲批判』、邦譯選集、補4、一八一頁）。このマルクス自身の言葉によつて、かれがまず哲學の批判に向つた理由は明らかである。

ところで、マルクスが批判しようとした哲學は、「完全に未拂いと名づけらるべきドイツの諸事情を現代的に敘述し」たものである。したがつて、ドイツにおいては哲學の發展が、哲學のうちにある表現をみいだすべきであるところの現實と、同じ高さになつていなかつたので、こゝから「必然的に、おくれ

た現實に對する哲學の背離と適合が生ぜざるをえなかつた。マルクスのヘーゲル批判は、ヘーゲル哲學のこの現實に對する背離と適合を明らかにし、それによつて「ヘーゲル哲學のイデオロギー的な、隱蔽的な、神祕化的な性格を暴露する」ことにあつた。

マルクスは、「ヘーゲルが、かれの哲學の基礎をプロシヤ國家の實存におき、かれの哲學がプロシヤ國家を眞の國家として、國家の本質として登場せしめたことによつて、いかにはなはだしくかれの價値をおとしたかを、指摘した」。プロシヤ國家の實存と國家の本質、この兩極は、マルクスにとつては、辯證法的に完全に一致するようには思われなかつた。なぜならば、この兩極は、それが統一されるためには、最初の志向を放棄せねばならぬところの媒介を必要としたからである。マルクスは『國法論批判』のうちで、『ヘーゲルを非難することはできない。なぜならば、かれは近代國家の本質をあるがままに描寫したからである。非難すべきは、ただ、かれが現にあるところのものを國家の本質と稱したところにある』(『國法論批判』邦譯全集一巻、三二四頁)といつてゐるが、「こゝに、マルクスが、そこからヘーゲルの立場を批判したところの、總括的テーマが示されてゐる」。マルクスがヘーゲルを非難したのは、次の諸點であつた。すなわち、ヘーゲルが、一方では、その體系において經驗現實の諸契機を、その體系構成の固有の論理に適合させることなく、使用したということ、他方では、ヘーゲルの諸前提

から當然歸結されねばならぬところの諸結果を隱蔽してしまつた、ということであつた。

ヘーゲル哲學の根本命題は、理性的なものは現實的であり、現實的なものは理性的である、ということであつたが、マルクスは、その直接的な所與性を脱して同時により高い段階に止揚されてゐないために、哲學的概念にまで高められてゐないところの、ヘーゲルの「非哲學的諸契機の素朴な攝取」を指摘することによつて、この命題の不合理性を明らかにした。マルクスにとつては、ヘーゲルと異なり、もはや、精神(理性)は、哲學の主語(主體)ないしは述語としてはあらわれない。「哲學の主體は他のもの、すなわち人間に、しかも、プロレタリアーに媒介された人間に、ならなければならない。そしてさらに、その人間の本質は勞働である」。

ヘーゲル批判のこれらの結論によつて、哲學それ自身が、「その内容と形式が變えられる」。哲學はいまや、マルクスによつて變形されて、「徹底的な批判」となる。あらゆるものをその根柢において把握しようとするところの哲學の内容、批判の對象は、ヘーゲルによつて抽象的に把握されたところの「此岸」となる。さらに、マルクスは、『法哲批判』においては、「かれによる辯證法の適用の例證になりうるいくつかの點を把握してゐた」ことも明らかである。

さて、ヘーゲルにとつては、『國家は人倫的理念の現實態——人倫的精神であつた』。すなわち、顯現的な、それ自身で明瞭

な實體的意志であつて、自らを思惟し自らを知り、かつ自らを知るものをしかも自らを知るかぎりにおいて成就する意志』（ヘーゲル『法哲學』、邦譯、岩波版、三一五頁）であつた。しかも國家の現實態は、ヘーゲルにあつては、理念と現實との、たんなる辯證法的統一ではなく、實體的統一にあるものであつた。ヘーゲルは、この實體的統一を説明するために、理念と現實とをまず分析し、次いでそれを止揚することよつてその直接性から統一にまで高めるところの、「辯證法的解剖」を必要とした。いまやマルクスは、國家は決して理念の現實態ではなく、その本質は理念にすぎないこと、すなわち、そこでは、國家の本質規定に、特定の獨立的な、恣意的な契機がいろいろとを指摘する。いいかえれば、「マルクスは、ヘーゲル哲學のイデオロギー的な、隱蔽的な、神祕化的な性格を暴露し」ようとしたのである。

このことは、ヘーゲルが家族と市民社會の國家に對する關係を取扱つてゐる箇所の、マルクスによる批判において重要となる。ヘーゲルは、私法の、すなわち家族と市民社會の領域を、國家の領域から區別した。國家は、一方では、私法に對し優越し、私法にとつて外部の必然性となるが、他方では、それは、私的領域の内在的目的である。そしてさらに、國家の長所は、ヘーゲルにあつては、その終局目的と個人の特殊的利益の統一という點にあつた。マルクスは、ヘーゲルの國家の、この二重の敵對的な規定に反對する。マルクスにとつては、國家の目的

と個人の利益の統一はつくりだされえないものであつた。「この二つの契機は、じつさいには、家族と市民社會が國家の概念の二つの理念的な領域として區別されることによつても、なお解決されえぬところの、ときがたい矛盾」であつた。國家は、ヘーゲルによれば、この二つの領域において、自らを媒介すべきものであつたが、しかし「それは、なんら現實的な媒介ではなく、一つの假象的な媒介であるにすぎない」ものであつた。したがつてマルクスにとつては、ヘーゲルの『理念は、理念それ自體から發展した現實をもつのではなく、日常の經驗を定在としてもつ』（『國法論批判』、邦譯全集一卷、二五二頁）ものとなる。

こゝから歸結されることは、ヘーゲルは、かれの哲學的諸契機を、かれの固有な諸前提からうみだしたのではなく、たんなる經驗からとり入れたのだということ、さらに、かゝるものとして「かれの哲學は、現實が理念の高さに止揚される以前に、論理の産物として完成されている」ということであろう。したがつて、ヘーゲルにあつては、「經驗から攝取されたものは、必然性ではなくて、偶然性の性格をもつ」にすぎないのである。マルクスは、もちろん、ここでは、まだ、「社會が國家を吸収し、國家の要求は特定の階級的利益のイデオロギー的表現である」というのちの定式化からは、へだたつていて、「本質的にはなお批判の領域にあつた」とはいえ、市民社會の國家體系への吸収をヘーゲルが完成していないこと、さらに市民社會の出現以後

は、もはや眞の國家は問題となりえないことをみぬいていたのである。

註(5) ヘルヴェーイクのこの書は、實存哲學、とくにハイデッガーの批判、今日におけるプロレタリアートの意義、マルクス主義とキリスト教(宗教)についても、若干ふれているのであるが、これらの點はこゝでは省略する。

三

ところで、理念と現實のヘーゲルの綜合たる眞の國家は、じつは、それ自體において矛盾を有していた。ヘーゲルの國家にあつては、各々の辯證法的契機は、現實的な統一にもたらされず、ヘーゲルは、かえつて、かれの時代の敵對的な諸原理を、すなわち、絶對主義的國家思想と市民社會の政治的解放たる民主主義とを、その綜合においてうみだしているのである。この兩原理のあいだには調和は存しない。君主的絶對主義は、憲法を制定し、政治的諸身分と市民社會を立法に關與せしめるといふその試みによつて、まさに自らの本質にそむき、自らと對立する。これと同様に市民社會のうちにも分裂と不和が生ずる。そこでは、各市民は、その社會的組織たる市民社會に屬するものであり、本質的には私人である。なぜなら、市民社會は、立法權の前に、政治的諸身分の場合のように、國家組織としてたつてはなく、公民として行爲しようとする市民は、その場合には、かれの現實的組織たる市民生活から抽象されねばなら

ぬ、からである。「理念と現實の一致せる眞の人間は、政治的人間であり、抽象的公民であるのに反して、現實の人間、感性的經驗的實存における人間は、市民社會に屬する」。この市民の私人と公民への分裂が、民主主義に内存する矛盾である。したがつて、政治的解放の本質は、「市民的諸身分の特殊者が、市民社會の、市民的國家の普遍者となつた」ということである。

封建制度における支配的な諸原理である土地への束縛、特權、家父長制的支配形式に對して、自由、平等、友愛の旗印をかかげた政治的解放によつて、社會は、政治的束縛を脱し、「これまで制限され、自らのうちに眠りこんでいた諸力を、直接的に實現させる」ようになつた點において、それは、一つの前進であつたが、しかしこのことの背後には、「あくことのない利潤追求、利己主義、他の人間を手段として、搾取の對象としてみなすための準備」がかくされていた。

かくてここに、非人間化の過程、「マルクスがヘーゲルの表現にしたがつて、人間の自己疎外として、近代文化の發展の核心として把握したところの過程」がはじまる。そこでは、人間は、人間として評價されるのではなく、あらゆる直接目的のための手段とみなされる。そこでは、よろこびと才能の享受を物物がさまざま、貨幣(所有)が眞の人間の關係の展開をさまざま、資本家はあらゆるものを、愛やよろこびさえも買ひとることができる。しかも貨幣の力は、まさにこれらの本質的な人間の諸關係を、たんなる商品におとしめるのである。このようにして

「自己疎外は市民社會における本質的な標識となり、市民社會の原理となる」。

ところで、第三身分にとつて「肯定的」な意味をもつていた政治的解放は、第四身分に「否定的」に作用することによつて、一つの新しい歸結を生ずる。それは、「第四身分が辯證法の原理そのもの、市民社會の否定となつた」ということである。プロレタリアートにおいて「自己決定の假象が消え、市民社會において内的な、目にみえぬ進行の過程であつたところの人間の自己疎外が、現實的となる」。ここにおいて、人間の自己疎外は、彼の實存において理解されるものとなり、辯證法は、「プロレタリアートにおいて實在辯證法 (Realphilosophie) となり」、「プロレタリアートは歴史の本質的な動因となる」にいたつた。こゝから、『法哲批判』におけるマルクスの辯證法の適用が明らかとなる。この時期のマルクスは、さきにものべたように、かれの思想の「根本的な定式化にまでは達していない」けれども、ヘーゲルとの對決が、「實り多き思惟方法としての、否定性の運動する原理としての辯證法の攝取によつて、行われていく」ことは、注目する必要がある。「存在するものとともに存在しないものが認識され、抽象とともに具體もまた把握されるところの、肯定的な所與のその否定への飛躍としての辯證法、社會的イデオロギー的な關連を、一面的にでなく、全面的に考察し明らかにしうる可能性としての辯證法」は、「マルクスの思惟活動における前進的な、革命的な契機である」。マルクス

は、『法哲批判』において、この否定性の原理としての辯證法を適用することによつて、プロレタリアートを發見し、「世界を變革しうる、哲學がその立場によつて實現されうる立場」に達しえたのである。

『プロレタリアートは、私有財産の否定を要求するが、それは、ただ社會によつてプロレタリアートの原理たらしめられたことがらを、つまり社會の否定的歸結としてプロレタリアートの關與なしにすでにプロレタリアートのうちに體現されていることがらを、プロレタリアートが社會の原理にたかめるだけのことだ』(『法哲批判』、邦譯選集、補4、一九一頁)。プロレタリアートは、政治的解放の結果、完全に自己疎外されるにいたつた。したがつて、政治的解放にかわる人間の解放が行われねばならないが、それは、「これまでの社會形態によつて是認された原理の、徹底的な遂行のうちによこたわつている」ところの、「人間性の完全な喪失であり、したがつて人間性の完全な回復によつてしか自らをかちとることのできない一階層」(同上、一九〇頁)たるところのプロレタリアートの形成によつて、可能となるのである。

こゝで、マルクスは、貧困の説明、現存の社會秩序の否定の説明から去つて、「否定の否定がプロレタリアートによつて果されねばならぬということによつて變革が實踐的な課題となる、という仕方」で、辯證法を適用していることが、「とくに明らかに」である。したがつて、こゝでは、理論と實踐は辯證法的に統

一され、「實踐は理論の自然的な延長であり、理論は實踐のうちで、あるいは實踐と密接に關連して發展する」ものとなつてゐる。

かくて、哲學とプロレタリアートが結合され、「人間が、本來の人間になる」ところの人間の解放は、「否定の否定」によつてのみ、完全に疎外されたプロレタリアートの媒介をおしてのみ、はじめて達成される。そしてマルクスの、「のちの『現實的ヒューマニズム』は、プロレタリアートにおいてのみ、その基盤を、そのにない手をもつことができる」のである。

以上において紹介したヘルヴェークの著書は、彼ものべているように、若きマルクスの「人間學的側面についての啓蒙的な概観」であり、また小著でもあるためか、まず論旨の展開の徹底さが指摘されるであろうが、それにもかかわらず、わたくしは、マルクスはヘーゲルから批判的に攝取した辯證法の具體的適用によつて、すなわち、ヘーゲルが「統」とみたところのものに「對立」をみ、それに「否定の否定」を適用することによつてプロレタリアートの歴史的意義の認識に到達することができた、というヘルヴェークの見解に、注目したい。この見解は、たとえば『獨佛年誌』におけるマルクスはフォイエルバッハと同程度において唯物論的であり、『神聖家族』、『ドイツ・イデオロギー』にいたつてはじめて社會にまで唯物論をおし進めた、という解釋の批判となりうるであろうし、さらに、よく試みはじめられたわが國の、この時期におけるマルクスの

ヘーゲル辯證法の「批判的攝取」についての具體的な研究にも、なにほどの示唆を與えるであろう。ともあれ、わたくしはヘルヴェークから、これらの點について學んだことを記して、つづいて、ベーレンスの論文の紹介にうつりたいと思つて、

註(6) 柳田謙十郎『マルクス哲學の基本問題』(一九五〇年、弘文堂)、二八六頁以下参照。

(7) 長州一二、前掲論文参照。氏は、『國法論批判』の考察を行つたこの論文のうちで、この時期のマルクスがすでに「二極的辯證法」への傾向を示していること、を指摘されている。

四

周知のように昨年はマルクス生誕百三十五周年にあつてしたが、このため、東ベルリンからでている月刊誌 "Aufbau" (文化政策、文學關係) は、その三月號と五月號をマルクス記念特集號とした。ベーレンスの『若きマルクスにおける經濟學的發展』は、この特集號(五月號)に掲載された論文である。著者ベーレンスについては、Professor であるということ以外に全く知ることをえない。

ヘーゲルがイギリス古典派經濟學に深い關心を示していたことは、すでによく知られていることだが、ベーレンスは、この點に着目して、「若きマルクス」研究にとつて新しい問題提起を行つてゐる。それは、マルクスはヘーゲル哲學とともにヘーゲ

ルが古典派経済學から繼承した經濟學的把握をあわせもち、したがつて、マルクスによるヘーゲル哲學の批判とともにまた古典派經濟學の批判もはじまる、という指摘である。この論文では、ベーレンスはかかる見解にもとづいて、ヘーゲルの經濟學的把握はいかなるものであるか、を考察している。

マルクスにおける經濟學的發展についての問題は、これまで研究されたことがなかつた。もちろん、若きマルクスが、まず『ライン新聞』におけるかれの活動をとおして、はじめて、社會的、經濟的および政治的諸問題にふれた、という見方は正しい。たとえば、古くはF・メーリング、新しくはA・ホルニエが、このことを明らかにしている。しかしながら、マルクスはいつはじめて社會的、經濟的および政治的諸問題にふれたか、ということが問題なのではなく、「いかにして若きマルクスは經濟學の諸問題にたずさわつたのか、なぜかれはそうしたのか、さらに、いつかれはブルジョア經濟學との對決の過程をはじめたのか、これが問題なのである」。したがつて、「いかにして、ブルジョア經濟學とのたえざる鬭争のうちに、マルクスの經濟學は形成されていつたのか、を明らかにすること」が重要となる。

ところで、マルクスは、青年ヘーゲル派の一人として出發し、その社會觀をなかなしくヘーゲル法哲學から攝取した。ホルニエは、その『カール・マルクスと近代思想の發展』のなかで、マルクスの思想の發展をたどるにあつて、『本質的にはヘー

ゲル主義を考察した』が、それは、『マルクスの思想形成期においてはヘーゲル主義の影響が有力であつた』からである。しかもホルニエによれば、マルクスはすでに、その『學位論文』において、『たえず、哲學のいかなる價值をも現實以外では拒否することによつて』、ヘーゲルを越えているという。いいかえれば、マルクスは、批判的哲學すなわち現存せる世界の批判としての哲學は、必然的に意志に、實踐的活動にならねばならぬ、という革命的思想から出發したのである。

このように、マルクスは、たんに哲學者としてではなく、ヘーゲル派の一人として出發した。しかるに、ヘーゲルは、ブルジョア哲學の頂點であるばかりでなく、その經濟學的把握においては、ブルジョア經濟學の頂點であるスミスの弟子であつた。したがつて、マルクスがヘーゲル哲學とともにヘーゲルの經濟學的把握をもあわせて身につけたことによつて、「マルクスによるヘーゲル哲學の批判とともに、古典派ブルジョア經濟學の批判もまたはじまらねばならなかつた」のである。

「ブルジョア哲學者としてのヘーゲルが、『對立物の統一』(レニーニ)としての辯證法によつて、その哲學において、ブルジョア階級の立場から達しうる最高の認識に到達したのと同様に、スミスとリカルドは、その勞働價值説によつて、經濟學において、ブルジョア階級の達しうる最高の認識に到達した。」しかし、ヘーゲルが、「かれ自身思いつきながら、しかも十分に把握しえず、誤用した」ところの辯證法によつて、ときがたい

矛盾におちいつたのと同様に、スミスとリカルドも、その労働価値説によつて矛盾におちいつた。このことから、「ヘーゲルにおける辯證法は、スミスとリカルドにおける労働価値説であつた」ということができる。ところで、兩者(辯證法と労働価値説)は、これを發展せしめれば、革命的な歸結をもたらすものであるが、それは、労働者階級の立場からのみ、可能であつた。かくてマルクスは、ヘーゲル哲學の批判をととして、プロレタリアートの世界觀に科學的表現を與えたとともに、プロレタリアートの革命的な世界觀にもつて經濟學を創造したのである。

さて、エンゲルスが書いているように、かれは一八四三年の夏に、『經濟的事實こそ、すくなくとも近代世界においては決定的な力であり、この經濟的事實がこんにちの階級對立のおこる基盤である』(『共產主義者同盟の歴史』、邦譯選集二卷下、四三五—六頁)という認識に達し、マルクスも、これと同様の見解に達したばかりでなく、『獨佛年誌』においてこれをさらに普遍化した。そして、一八四五年の春、兩者がブリュッセルで再會したときにはマルクスはすでに『唯物論的歴史理論の概要を發展させていた』(同上、四三六頁)ので、それ以後、かれらはその仕上げにとりかかつた。したがつて、いまや、マルクスとエンゲルスの出發點であつたところのヘーゲルは、いかなる經濟學的把握をもつていたかが問題となる。

五

ヘーゲルは、G・ルカーチがその『若きヘーゲル』において確認したように、『イギリス古典派經濟學の諸問題を哲學の諸問題と、あるいは辯證法の諸問題と關連させて考察したところの』、『市民社會との對決によつて、經濟の諸問題と眞劍に對決することを餘儀なくされたところの』(ルカーチ)、この時代における唯一のドイツの思想家であつたが、それは、決して偶然ではない。なぜなら、「ヘーゲルが發展せしめた辯證法の特殊形式は、むしろ資本主義の諸問題との、經濟學の諸問題との對決から直接に生じたものだつた」からである。その故にこそ、マルクスは、ヘーゲル辯證法の批判によつて、唯物辯證法を發展させることができ、それをなかならず經濟學に適用することができたのである。

ヘーゲルの經濟學的把握を知るためには、『イエナ實在哲學』(Jenenser Realphilosophie)と題して出版されているかれのイエナ大學における講義草稿(一八〇三—四年、および一八〇五—六年の講義)が重要なものとなる、として、ペーレンスは主としてこの講義草稿を考察する。

ヘーゲルは、なによりもまずスミスから分業の概念をうけついでだ。ヘーゲルによれば、人間は、その欲望と充足とのあいだに労働を挿入することによつて、したがつて、人間が自然的な直接性を脱することによつて、一般に人間に生成する。ヘーゲルは、その觀念論的見地にもとづいて、労働から獨立に人間の精神的諸能力の自覺についてのべ、労働についての本來の考察

は、人間のこれらの諸能力がすでに形成されているより高い段においてなされているにもかかわらず、「労働の問題に注目した点において、かれの時代の他の思想家をはるかに凌駕していた」のである。ヘーゲルは、一方では、道具の發生を労働の辯證法から、機械への移行を、道具を用いての人間の労働による自然法則の利用から説明したが、他方では、かれは、労働の社會的諸規定を、ますます複雑化する社會的分業に、個々の労働者のますます大なる専門化に發展させた。したがつてヘーゲルは、これによつて、まさにスマイスと同様に、「一方では、労働の技術的完成は、すでに高度に發達した社會的分業を前提するということ、他方では、しかし道具の完成たる機械の出現は、社會的分業をますます促進するということ」を明らかにしたのである。すなわち、『人間の労働は、その欲望のための個人の労働として存在すると同時に、普遍的な、觀念的な労働として存在すること』をヘーゲルはくわしく論じている。『人間は、自分が使用するものをもはや自ら労働してつくりださず、自分が労働してえたものをもはや使用しない。いいかえれば、労働は自己充足の現實性ではなく、その可能性であるにすぎない。人間の労働は、一つの形式的な、抽象的に普遍的な労働となり、したがつて、人間はその種々の欲望のうちただ一つのための労働に自らを制限し、そのかわり他の欲望に必要なものは交換して獲得する』。ヘーゲルがこゝに示したものは、「生産手段の私有制にもとづく社會的分業と、そこから必然的に由來する、勞

紹介

働生産物の商品としての相互交換の描寫」である。したがつて、ヘーゲルが、普遍的労働から價值と貨幣を導きだしたとしても、それは以上のかれの考察の結果に外ならない。

さらにヘーゲルは、分業の進行につれて、人間による自然法則の認識が深まることを明らかにして、人間の労働は、完全に機械的になるといふ。『労働が抽象的になればなるほど、ますます人間は抽象的に活動するにすぎぬものとなる。そしてそれによつてかれは、労働からまぬかれ、自ら活動するかわりに、外的自然を活動させることができる。人間は素朴な運動を使用する。そしてかれはこれを外的自然のうちにみいだす。あるいは、純粹な運動は、まさに時間と空間の抽象的形式の關係——抽象的な外的行爲、すなわち機械である。』

ところで、ヘーゲルは、労働者におよぼす機械の影響についても、「スマイスと同じ高さ」で語つてゐる。すなわちヘーゲルは、分業をとおして道具と機械が發明（發見）され、それが普遍的な財となるのべたのちに、次のようにいふ。『かくて諸労働はより機械的になるのみである。その結果人間は、全體に對してのみ労働を減少させるが、しかし個人に對してはそうではなく、むしろ増大させるのである。労働が機械的になればなるほど、労働はより僅かの價值しかもたず、人間は、このようにして、ますます多く労働せねばならなくなる』。ヘーゲルは、こゝでは、スマイスやリカルドにみられるような「客觀性」をのべているのである。「ブルジョア思想家たるヘーゲルは、社會

のブルジョアの形態を唯一の可能な、自然的なものとなし、いたので、スミスやリカルドと同様に、資本主義的分業に内在する機械の作用を、一般的な機械の使用（の場合）と混同してしまつた」のであるが、それにもかかわらず、それに伴うところの労働者の非人間化をみぬいて、『労働者は、労働の抽象化によつて、ますます機械的になり、鈍感になり、活氣を失う。精神的なもの、すなわちこの充實せる自覺的生命は、一つの空虚な行爲となる。自己の力はゆたかな把握に存するが、この力は失われて行く』。

つづいてヘーゲルは、このことから、生産性および社會的分業の發展と、欲望の發展との交互作用を明らかにしている。『欲望は、それ（社會的分業）の發展によつて、幾倍にも擴大され、各々の欲望はより細分される。趣味は、洗練され、多くの差別を生ずる。使用物がよりよく使用されるような製造法が要求される』。このようにして、ヘーゲルは、『労働の單純化、機械の新發明等々がたえず』行われる結果、資本主義の無政府性がうまれ、さらに、労働者にとつての實存の不安定性、すなわち窮乏と貧困とが発生すること、を明らかにしている。『大なる富と大なる貧困の對立が生ずる。貧困は、自らに僅かのものでもたらすことを不可能にする。富は、多數がそうであるように、それ自身力となる。富の蓄積は、一方では偶然によつて、他方では、分業の普遍性によつて生ずる。富はいわば、一つの收斂點である。その視野は普遍的なひろがりをもち、それ

は、多數が少數をひき寄せるように、自らのまわりに集める。もてる者には與えられるのである』。そして『富と貧困のこの不平等、この窮乏と必要は、意志の最高の分裂たる内的な反抗と増悪をもたらす』。またヘーゲルは、次のようにもいつている。『家内工業とマニユファクチュアは、まさにその存続の基礎を、一階級の貧困の上にもつてゐる』。したがつて、このことから、「ヘーゲルが、資本主義的生産についてのセンチメンタルな嘆きからと同様に、その否定的側面の隠蔽からともはるかにへだたつてゐる」ことが明らかとなる。ヘーゲルは、この過程の必然性を把握したばかりでなく、その歸結をもみぬいてゐた。

ところで、ヘーゲルは、このような「リアリズム」を古典派經濟學者たちと共有したのみではなく、また「かれらの幻想と辯護論的見解をもあわせもつた」。ヘーゲルは資本主義的發展の必然性をみぬいてゐたが、『ときおり、政府および國家がこの必然性に干渉しうるかの如き幻想』（ルカーチ）をいだいた。ヘーゲルがブルジョア思想家の一人であり、辯證法的觀念論者であつたところに、かかる幻想の原因がある。にもかかわらず、『それによつて、ヘーゲルの到達した認識の、ドイツにおいては殆んど信じられぬくらい輝かしい高さは、損われるものではない』（ルカーチ）。かれは、その觀念論的幻想を「深いそして正しい認識」と結合してゐるのである。このことは『法哲學』にも示されてゐる。ヘーゲルは、そこで、資本主義的發展の必然的歸結としての、またその前提としての貧困をみておりなが

ら、同時にそのプロレタリアートを「偏狭なブルジョアの傲慢さ」をもつて、『賤民』として特徴づけているのである。

ところで、ヘーゲルは、周知のように、スミスから労働価値説を繼承した。この点については、かれは『講義』のなかで次のようにいつている。『個々人の欲望の擴大とその活動とのあいだに、全民族の労働がくわわる』。『各人の労働は、その内容からみれば、すべての人の諸欲望にとつても、またその充足のための適合性にとつても、一つの普遍的な労働にほかならないつまりそれは一つの価値をもつのである』。『種々の抽象的加工作物』のあいだに、すなわち社会的分業によつてうみだされた生産物のあいだに、『いまや一つの運動が生じ、それによつて、労働は再び具體的な欲望にまで生成しなければならぬ』。そして、それにもとづいて多くの『加工物』のあいだに運動が生ずるところのこの『普遍性は、労働の同等的あるいは価値である』。

つゞいて、ヘーゲルは、古典派經濟學の高さにたつばかりでなく、その辯證法によつて、「スミスやリカルドよりも、価値と貨幣の本質により深くたちいつて理解する」。すなわちヘーゲルは、『物としてのこの價值自體が貨幣である』ことを確認して次のようにいつる。『具體への、占有への還歸は交換である』。多くの諸労働は、その概念、その抽象を實現しなければならぬ。『労働の普遍的概念は、すべてのものを普遍者として表象するような一つの物でなければならぬ。貨幣はこの物質的な、實存する概念である。それは統一の形式、もしくは諸欲望のあら

ゆる物における可能性である』。こゝでヘーゲルは、辯證法の用語で、貨幣があらゆる商品に共通する實體の、すなわち商品の價值の物體化であることを、明らかにしているのである。さらにヘーゲルは、商品生産の無政府性にも注目している。『欲望とこの普遍性に高められた労働は、(商品生産間の相互的、
な販賣と購買として)對目的に、一民族のうちに、共同體の、相互依存の巨大な一體系をうちたてる。それは、盲目的にしかし基礎的にこゝかしこ運動し、野獸のごときものとして確固たる支配と統制を必要とする』。ヘーゲルはこのように、人間を支配し、無力にするところの經濟が人間自身によつてうみだされたものであることをみぬいていた。

しかし、かゝる「ヘーゲルの分析の長所」には、ヘーゲルが古典派經濟の矛盾にみちたカテゴリーを、『具體的に内在的に認識し、十分に検討し、それによつて辯證法にまで高めることなしに』(ルカーチ)そのまま受け入れたということ、さらにかれがドイツの經濟的發展段階に順應せざるをえなかつたということ、が結びついている。その結果、ヘーゲルは、「イギリスにおける産業革命の重要性をよく認識していた」にも拘わらず、「商人において、資本主義的發展の中心的特徴をみていた」。「商人の労働は純粹な交換であつて、自然的なあるいは人工的な生産や製造のどちらでもない」。したがつて、貨幣は商人の原理であり、その志向は、『特殊者がそこで完全に外在化され、もはや通用せぬところの精神の喪失である。家族、幸福、

生命等々は破壊され、冷酷がもたらされる。』かくて、ヘーゲルは、価値と貨幣の本質の理解にかんして、古典派経済学者よりもはるかにすぐれていたが、しかしおくれたドイツの諸事情に制約され、「古典派ブルジョア経済学の價值論の決定的契機たる、工業生産における資本家による労働者の搾取を理解しなかつた」のである。

つづいて、ベーレンスは、ヘーゲルの『現象學』(とくに『主人と奴隸』)における労働の問題について考察して、次のようにいう、ヘーゲルは、そこで「すべてこれまでの人間労働は、労働者にとつての損失を伴う奴隸労働であつた」ことを指摘している。自己意識の發展の道は、『現象學』においては、主人のそれではなく、奴隸の意識をおして行われる。『したがつて自立的意識の眞理は、奴隸としての意識である。…労働をおして奴隸は自分自身にたちかえる』(『精神現象學』邦譯上、二七四頁)のである。それは人間の意識の發展の道であり、労働をおしての自己實現の過程である。ヘーゲルにとつては、この過程はまさしく精神の創造物であるが、しかし、「意識の現象する形式を運動の流れにおいて、過程として把握しようとしたために、ヘーゲルは、労働のカテゴリーに着目せざるをえなかつた」のである。

要するに、ヘーゲルは、古典派経済學と同様に、市民社會を歴史的發展の最後の形態とみなし、これにもつづいて辯證論的な見解をもつたが、それにもかかわらず、かれは「かれの時代

の、とくにかれの時代以後のドイツブルジョア経済学者たちよりも、資本主義的生産の本質にかんして、はるかにすぐれた認識に到達した」ばかりでなく、古典派経済學の諸カテゴリー、とくに労働のカテゴリーを、辯證法的に把握していた。たとえ形而上學的であつたにせよ、辯證法學者としてのヘーゲルの哲學の見解は古典派経済學を凌駕していたので、かれは「労働の本質を、価値と貨幣の本質を、さらに資本主義的生産の必然的發展傾向をみぬくことができた」のであり、また、「イギリス古典派経済學を凌駕する經濟學的對象の把握の高さ」に達しえたのである。

『經濟學・哲學草稿』(以下『草稿』と略記する)のうちで、マルクスはヘーゲルについて、次のようにいつている。『ヘーゲルは近代國民經濟學の立場にたつてゐる。かれは、労働を本質として、人間が自己を保證する本質としてとらえる。かれは労働の肯定的側面のみをみるだけで、その否定的側面をみないのである』(『經濟學・哲學草稿』、邦譯選集、補4、四〇四頁)。マルクスによつて、このように特徴づけられたヘーゲルの經濟學的把握は、かれの社會哲學、とくに法哲學の一部を構成する。かれは、社會諸關係のうちにかくされている、しかも經濟學のうちに反映されているところの辯證法的カテゴリーを、かれの哲學體系と一致させつづ展開するために、古典派經濟學の成果を「十分に利用し」た。ヘーゲルにとつては、「社會の經濟」は、『人間の社會的活動の、もつとも直接的な、もつとも原初的な、そして

もつとも明瞭な現象様式』(ルカーチ)であつたのである。以上から「労働のスキスの概念」の、ヘーゲルにおよぼした決定的な影響が理解される。

ところで、若きマルクスは、このヘーゲルの経済學的把握を、かれが社会的、政治的および経済的諸問題に密接にふれる以前に、すでに、ヘーゲルの『現象學』と『法哲學』から學んでいた。マルクスはここから出發した。そしてこれに、ブルジョア経済學的批判的對決を結びつけたのである。そして、マルクスとエンゲルスの初期の著作には、「辯證法の諸問題を經濟學の領域においてこそ、研究せねばならぬ」という明確な認識がみられる。たとえばエンゲルスの『經濟學批判大綱』のうち、「辯證法と經濟學の關連を顯著にみいだす」ことができるし、とくに、マルクスの『草稿』の労働の諸問題においてそうである。そこではマルクスは、ヘーゲル觀念論の批判を行いつつ、ヘーゲル辯證法の形成に、古典派經濟學によつて把握された労働のカテゴリーが、主要な役割を果したことを明らかにしている。したがつて、われわれは、若きマルクスの研究にあつては、こゝに要約されたヘーゲルの經濟學的把握から出發しなければならぬ。そして、「いかにして、ヘーゲルの批判的克服のうち、マルクスの經濟學は發展して行つたか」を考察することが重要となる。

最近東歐では、ヘーゲルの新しい研究が行われているというが、その代表的なものは、なんといつても、ルカーチの『若き

紹介

ヘーゲル』であることに異論はなからう。以上に紹介したベーレンスの論文は、みられるとおり、このルカーチの研究によつていようであるが、一讀して氣づくことは、ヘーゲルの經濟學的把握が、ベーレンスによつて、いかにのちのマルクスのそれに近くおかれているか、ということであろう。このようなヘーゲル解釋については、その源流であるルカーチのそれとともに、どのように評價したらいいのであろうか。「人民民主主義の本質」をみあやまり、「平和革命論」をとえ、こゝから「西歐ブルジョア文化への妥協」を示した、というルカーチに對する批判⁽⁸⁾、さらには、ルカーチのヘーゲル研究と同じ流れに屬すると思われるE・ブロッホに對する「ヘーゲル的」という批判を思いあわせるとき、この「新しいヘーゲル研究」が、したがつてまたベーレンスのこの論文が、かれらのそのような立場をなんらかの形で反映していないであらうか。もしそうであるとすれば、この點がかれらのヘーゲル解釋の評価にあつて、一つの手がかりを與えてくれるであらう。しかしヘーゲルについてほとんど語る資格をもたないわたくしは、こゝではただ、そのような問題を指摘するだけにとどめなければならぬ。

ところで、ベーレンスの研究の出發點は、マルクスはヘーゲル哲學とともにヘーゲルの經濟學的把握をうけつぎ、したがつてマルクスのヘーゲル批判とともに古典派經濟學の批判もはじまらねばならなかつた、ということであつた。そして、これと關連して、マルクスはこのヘーゲルの經濟學的把握を、具體的

諸問題（社會的、政治的、および經濟的諸問題）にたずさわる以前に、すでに『法哲學』や『現象學』から學んだのだ、という。が、しかし、果してこのことは若きマルクスの著作、たとえば『國法論批判』のうちに實證されるであろうか。また、『草稿』のうちにみられるマルクスの、ヘーゲルの經濟學的把握に對する特徴づけは、むしろ、ベーレンスの見解とは逆に、マルクスの古典派經濟學の研究をとおしてなされたもの、といいえないであろうか。マルクスは、古典派經濟學の研究をとおして、ヘーゲルの經濟學的把握の位置をあらためて認識し、それによつて、ヘーゲル觀念論（辯證法）の批判を完成することができたのではあるまいか。

このことは、なによりも具體的な研究のうちに、實證的に答えられねばならないことだが、ベーレンスのかかる立論の基礎には、事實の順序がそのまま認識の順序とみなされている、という速断があるように思われる。なぜなら、ヘーゲルにそのような經濟學的把握があつたということが、それだけでただちにヘーゲル哲學の攝取とともに、具體的諸問題にたずさわる以前に、それがマルクスにうつがれた、ということにはならないからである。

しかし、以上のことがいいえたとしてもなお、ベーレンスの論文は、ヘーゲルの經濟學的把握の位置づけを行うことによつて、マルクスがその出發點においてすでに『資本論』にいたる發展の必然性をもつていたことを明らかにした點において、價

値の高い研究である、ということができよう。わたくしは、ベーレンスの研究を一つの尺度として、あらためて若きマルクスの著作をみなおす必要を、つよく感ずるのである。

以上にのべた諸點において、わたくしはヘルヴェークとベーレンスから多くのものを學ぶことができたのを感謝しつつ、この不十分な紹介を終わりたいと思う。（一九五四・一・一五）

註(8) たえば、ルカーチ『ドイツ文學小史』邦譯（岩波現代叢書）の譯者あとがき参照。

(9) これは、わが小松攝郎氏による批判である。くわしくは『思想』一九五三年十二月號所載の同氏の論文『ヘーゲルと辯證法』参照。

(10) ベーレンスとほとんど時を同じくして、わが國でも芝田進午氏による同様な研究がなされている（『思想』一九五三年八月號所載、『ヘーゲルにおける「労働」の問題』）ので、あわせ讀まれたい。

執筆者紹介

大畑末吉	一橋大學教授
橋本郁雄	一橋大學講師
良知力	一橋大學特別研究生
柴田裕	酒田商業高等學校教諭
宮鍋	一橋大學特別研究生